

目的 古代遺跡等から出土した織物の残欠や繊維類、或いは中世以降の残存織物類などの染色に用いられていた天然染料の中には、今なお、染められた当時に近い色調を保っているものも多い。しかしながら、それらの個々の試料に用いられている天然染料の種類や染色の方法については不明のままとなっているものが多い。従って、これらの染料を鑑別し、また、それらの方法を確立することが出来れば、古代の染織技法に関する知見が得られ、さらには古代文化の交流等の解明にも資するところが大きいと考えられる。

方法 古代織物試料として、①約二千年前のものと考えられるイラク・アッタル古墳から出土した羊毛／麻織物（国士館大学との共同研究）、②室町時代のものと考えられる我が国の絹織物などを使用した。これらの中で、赤紫系の色調を有するものについては、DMF—アルカリ抽出を試み、黄～赤の色調を有するものについては、金属イオンの分析と酸分解—溶媒抽出などの方法を組み合わせて試みた。

結果 ①の試料については、いずれもその色調と出土状況すなわちそれらの織物が当時の王または王族を弔うために用いられていたものであることから、当初、貝紫染めであろうと推定されていたのであるが、鑑別実験の結果、それらの中の幾つかは確かに貝紫染めであったが、他の試料はケルメス染めの糸と藍染めの糸を巧みに混紡することによって、肉眼では恰も貝紫染めであるように見せているものがあつた。また、②の試料の中で前期の辻が花染めとおぼしき織物の黒色部分は元素分析の結果、Al、Si、Caなどが認められたが、推定していた鉄媒染によるFeは検出されず、有機溶媒によっても黄色成分しか抽出されなかつたことなどから墨染めであると考えられる他、多くの知見を得ることが出来た。